
真木山太 創作詩集 2

真木 山太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真木山太 創作詩集2

【Nコード】

N4247H

【作者名】

真木 山太

【あらすじ】

2009 - 07 - 14より創作年順に載せています創作詩創作年
順集の続き本です

創作詩（ポエム）創作年順集2

ポエム
創作詩創作年順集2

2009 - 07 - 14 }

この詩集控は過去に作ってきた全ての詩
を制作順に掲載したものである。

真木山太 過去投稿掲載作品 一覧表

第一集

014	013	012	011	010	009	008	007	006	005	004	003	002	001	Vol 1
				2009 - 09 - 23	2009 - 09 - 13	2009 - 09 - 12	2009 - 09 - 09	2009 - 09 - 05	2009 - 09 - 05	2009 - 07 - 19	2009 - 07 - 16	2009 - 07 - 15	2009 - 07 - 14	
				「泣きべその空」	「霧の馬車道を抜けて」	「切なき望み」	「地球はおしゃれ」	「心に伝わる言葉は」	「言葉なんかいらない」	「あきらめないで」	「ブランデーとウッドベース」	「暑き朝」（短歌&詩合体）	「友よ」	

-	v	0	0	0	0	0	0
-	o	2	1	1	1	1	1
-	1	0	9	8	7	6	5
-	2						
執筆中							
-							
-							
-							
-							
-							
-							

詩集「第一集」

真木山太 創作詩集2

Vol 1

- - - - -

友よ

作詞：たけぼんだぬき

お前と 俺の部屋で

朝まで下らん話を肴に

安いウイスキーを飲んで

ひがな一日を過ごして

少ない金を

寄せ集めて

キャベツ買って

米買って

よく 俺んちで寝泊り

していたよな

俺もお前がいるから嫌だつて

思っただこともなかったし

最後にはお前 自分のアパート

引き払って俺んちに

住み着いてよ

大家さんにおん出されそうに

なつたよな

まあよくもあの狭いアパートで

住み着いたもんだよ。

タバコも俺のを勝手に吸って

たまに パチンコで勝ったから

ってまとめて持ってくるから

許してただけだな。

おかげで俺のタバコの趣味が

お前に合わせて変わっちまった

結局俺が 住んでたアパート

出る事にして 俺は彼女と

二部屋あるアパートへ

引っ越して・・・

あれってよ 俺んちのアパート

乗っ取られたんじゃないのてよ

思ってたぜ

まあ 俺と彼女はその方が

良かったんだけだな

あれから少しの間 お前の

顔見なくなつて

どうしてんのかな

つて心配してたんだぜ

一年彼女と暮らして

まるで 赤ちようちんの

世界だつたぜ

歌詞の通り キャベツばかりを

かじつてた ってさ

うさぎじゃないよな 俺たち

つて言つてよ

彼女と大笑いしたもんだ

その内お前の変なうわさ聞いてよ

心配していたんだ

お前は上にバカが付くくらい

優しい奴だったから

彼女にいい様にされたんじゃないかって

心配してお前のアパート行ったら

もう引越したよって大家に言われて

お前は行方知れず

大学でも学部のアたりを探して

見つからなくて・・・

諦めかけていた時 お前の悲報を

新聞で見たんだ

ショックで少しの間 立ち直れなくて

お前みたいないい奴が何でだ・・・

彼女とも別れたようだな

何があっただろうな

お前には・・・

おれと別れたあとで

情けない最期を見せてくれるなよな

相棒よ

俺はあれから色々な目に合って来たけど

図太く生きてきたぞ

まだこれからも生き抜くぞ

お前のためにもな

また一番大切だった彼女の為にもな

生き恥でも何でも晒してでも

生き抜いてやる

見てろよ 相棒よ・・・

- - - - -

暑き朝

作詞：たけぼんだぬき

暑き朝 めざめ水打つ 庭の虹 涼しき時は ほんのひと時

朝顔の 顔見つち飲む コーヒーは 時を忘れて 安らぎ浸る

炎天の 稲伸び風に 揺れる身の 空飛ぶ鳥の 日陰探して

飯野山 暑さに揺れて 陽炎の 水引く田んぼ 影を映して

夏景色 水引く田にも 闘うは タガメとおたま 面白きさま

- - - - -

暑い朝 目覚めて

額に残る 汗の跡

シャワーを 浴びて

体を冷やす 弾ける水の

心地よさ ボディシャンプー

泡立てて 体の汚れ

流す時 体のべとつき

とれていく

ほっと一息 飲むコーヒー

ながす 音楽 辻井氏ピアノ

ピアノの シャワー浴びながら

心の汚れ 消えていく

人として 生きるとは

安らぎ 安穩 求める事

長くて 百年生きるなら

心の 平安願うのは

誰しも 同じ思ふこと

小さき いのちも 争そつて

我が身の 置き場 確保する

生きる性 生きる術

生きる為 生きるとは

ひと時 田んぼに目を遣れば

額ほどの 場所取りを

争い それが 生の為

いかなる時代も 同じ事

繰り返して 今至る

大きな空に 平穩の

虹が かかる時来るか

それとも 互いに殺戮の

残酷戦い 繰り返すか

願わくば 平和の鐘が

鳴り響く 時よこいと

願うのみ

人の心に 花が咲き

笑顔の あふれる

この世の中に

なっておくれと

思う朝

生きる争い 負けたなら

それも叶わぬ 現実の

厳しき人生 それが路

夏の 日差しのきつさより

人生の 厳しさか

儚い 夏の夢物語

それでも 人は生きていく

生きている内 目覚めて

動く

いずれは 嫌というほど

眠らねば ならぬ

動ける 最期が 死への旅

静と動 生と死 明と暗

平和と戦争 喜びと怒り

憎しみと平安 優しさと冷血

愛と瞋恚しんに

何れも 人の 表と裏

紙一枚も入らぬ 己の姿

それが 愛すべき

人の真実か

それでも私は 今日を

喜び 生きていける

感謝に ひたる

友の 心に 謝しながら

これが私の 生き様なれば

昇る 太陽にも

感謝しつつ 前に向いて

逃げることなく 生きていく

それでいい・・・

ブランデーとウッドベース

作詞：たけぼんだぬき

土曜の夜 風呂上り

10階の窓を開け放ち

静かな港の灯りを

見つめながら

ポリウムを少し絞って

回転する ターンテーブルを

眺めながら 針をそつと下ろす

スピーカーから流れ出る旋律は

ジャズだよねえ

夜の港に良く似合う・・・

ロンカーターのベースの響きに

酔いしれながら 一週間の

疲れを癒す

黒のバスローブじゃないけれど

Tシャツに半ズボン

色気も何もないけれど

これが一番 気楽でいい

台所に大切に置いてある

ロイヤル・ブランデー

小さな ナイフで 封を切り

ブランデーグラスに注ぐ

とくとく という音が

ジャズのウッドベースに

よく似合う

テーブルの上には

先日から 取り組んでいる

帆船 日本丸の プラモデル

ロープの括り方 アロニアルファ

の使い方 味のある色合いにしたいくて

買った アクリル塗料

資料を眺めて 出来上がりを

想像する

作りかけの船を眺めて

ブランデーに また口をつける・・・

まだ2 / 3しか出来ていないけれど

もう心は 大海原・・・

軽やかで シックで 渋い

ウッドベースの音が 部屋に

広がって 心地よい空間を

作っている・・・

贅沢を言えば きりがないが

今なら アロマキャンドルでも

燈せば もっと最高なんだろう

藤棚商店街で買った

チョコレート 冷蔵庫から

取り出して ちょっとずつ

かじりながら ブランデーを

飲む・・・

残業ばかりの毎日

一月に四回だけの贅沢

土曜の夜に ジャズが合う

あきらめないで

作詞：たけぼんだぬき

いつも あなたの

近くにいますから

空に輝く

太陽のように

あなたを

見守っている

勇気という名の

友がいるじゃない

泣きたい時は

思いつきり

泣いて 泣き疲れたら

一緒に 笑いましょ

人は 涙流す分だけ

前に 進む事が出来るよ

誰かの 胸に 頼るよりも

大地に 伏して 泣いた方がいい

あなたを きつと

受け入れてくれる

あなたをもっと

強くしてくれる

叶わないなんて 言わないで

虚しいよなんて 思わないで

頑張ろうって 言って

期待に胸 躍らせて

明日への 希望を

大切にして

もっと先を

見つめて生きていこう

過去は もう過ぎ去った化石

明日の朝に

また陽が昇るように

あなたの心にも

きっと眩しい朝が来る

厳しい時代に

生きているからって

泣いてばかりじゃ

泣いている時間が

勿体無いじゃない

夜のとばり 下りて

眠りの前 布団をかぶって

そっと流れる 熱い涙

頬をつたわって

枕濡らす事もあるけれど

眠りの後で 迎える朝を

信じて 生きていこう

明日の 太陽

もうすぐそこまで

光満ちた 朝を

迎えられるから

遠き希望の夢などよりも

明日への 小さな希望を

信じて 生きていこう・・・

言葉なんかいららない

作詞：たけぼんだぬき

いやだねえ 長く連れ添えば

言葉など いらなくなる

自分の腹の中見透かされて

何故か窮屈

だけど それだから

一緒にいられるのかも

互いが 相手を

信じられなくなったら

一緒に暮らしては

いけないよね

一番 自分を

分ってくれている

あなただから

こうして

寄り添って

助け合って

生きていける

幸せも 悲しみも

辛い事も・・・

嘘は 君には

すぐばれる

何気ない

行動が

素直な 自分を

見せている

君の前だからさ

きつとね・・・

二人で 飲み交わす 夫婦酒

星の綺麗な夜くらい

お前と飲んで のんびりと

土曜の夜を 過ごそうよ

おっと やましい心は

無いからね

誤解はせずに

飲んでくれ

も一度 昔の

あの頃に 戻って

お前を口説こうか

お互い 増えた

顔の皺

苦労してきた

証だな

昔は 二人で

飲む酒は

ウイスキーか

ブランデー

今じゃ

焼酎レモンサワー

安くて うまけりゃ

それでいい

色気も 愛想もない二人

それでも お前が横に居て

注いでくれればそれでいい

時の流れを さかのぼり

たまには 二人で

踊ろうか それとも

あの日の夜に 交わした

キッスを試してみるか

レモンサワーの味がする

昔はもつと甘かった

互いの身体を 思いやる

そんな歳に なったんだ

一緒に生きた 人生の

重ねた分だけ 愛は深まると

思っていたけど

変わらないもんだな

希薄な 夫婦にだけは

なりたくない

ここまで共に生きてきたんだ

昔のように行かずとも

互いを 思える夫婦に

なっていこうな

なあ お前・・・

-
-
-
-
-
-

心に伝わる言葉は
作詞：たけぼんだぬき

あなたへ 心を伝えたい

私の 思いを伝えたい

言葉を選んで話す事より

心のままを 伝えれば

それでいい

黙っていても 伝わる

心もある

語りつくしても伝わらない

思いもある

二人のいのちの共鳴が

伝道師となつて

波動を呼び起こす

どちらかが 不協和音を

奏でていれば 伝わるものも

伝わらぬ

声という伝導媒体・・・

心こそ その源

小さな 響きでも

共鳴すれば大きくなる

あなたとの 伝道媒体は

言葉 それとも 声

それとも・・・歌

響いてくれるあなたが

私には 宝物

ここにいて

あなたの側へ

飛んでいけるもの

あなたに語りかける

あなたのいのちと

つながる物・・・

ちっちゃな声も

あなたへ届けと

響かせる

イルカや鯨は

地球の裏側の友へ

メッセージを送れるらしい

私は 残念ながら 人

人ならば 人らしく

言葉で 文字で 歌で

伝えよう

私の思いを載せて・・・

-
-
-
-
-
-

地球はおしゃれ

作詞：たけぼんだぬき

君の笑顔は 輝いて

素敵な 顔を

見せてくれる

空に輝く 太陽は

虹色に 光りを放ち

どこまでも青く澄んだ

空は 白き雲をあしらって

どこまでも続いてる

大地に 色とりどりに

あしらう花が 緑の絨毯を

綺麗に飾る

そして海は 深き蒼の

色を満面にたたえ

時々 飛び交う

トビウオが 水面を

駆け抜けてゆく

波打ち際に 白き波

空気を含んできらきらと

煌き揺れる 海の色

山に 木立の合間を

縫って 木漏れ日

大地に絵を描く

山から下る清流は

小川を抜けて

川となり 水面に

浮かぶ 大地の景色

様々に色や形を

変えながら

流れ下る

地球はなんて

おしゃれなのだろう

大地の奥深く マグマは

そのエネルギーを いっぱい

貯めて 躍動のリズムを

刻んでる

時々大地を引き裂いて

現れるそのいのちは

無限の力を 見せ付ける

宇宙の暗き闇の中

青く眩しく光る地球

おしゃれの限りを尽くして

美しくそこに存在する

大気は 太陽の光りを

分けて 虹を見せる

極点には 磁場の力で

オーロラーの 天体ショー

どこまでも 美しい

地球の姿

その姿　いつまでも

そこにあれと　願う・・・

-
-
-
-
-
-

切なき望み

作詞：たけぼんだぬき

身体濡れる　秋雨

心濡らして　涙雨

切なさ　と　虚しさ

温めるものなき

冷たき雨に　心浸せば

山々も　大地も

寂しく見ゆるとき

山に咲きたる　彼岸花

空ろな心を引き摺って

山を歩けば 時は去る

目先見えぬ 人生の

足元頼りに 歩く路

秋の雨は 心を冷やす

癒す場所さえ見つからぬ

打ちのめされる 冷たき雨に

霞んで見える 明日への望み

それすら今は 切なくて

ただ踏みしめて 前に前にと

進むだけ・・・

願わくば 雨止みて

青き空を 見せたまえ

空に虹を 掛けたまえ

明日への望みを 見せたまえ

人の世 冷酷なるを知る我が身

わずかの夢でも見せたまえ

豊かであれとは 願わぬゆえ

幸なる自分を 望まぬゆえ

今日一日の糧と 眠れる枕を

与えたまえ

霞の空に 願うのみ

薄暗き空に 祈るのみ

わずかの暖を望むのみ

爽やかな 秋の空を

願うのみ・・・

-
-
-
-
-
-

霧の馬車道を抜けて

作詞：たけぼんだぬき

悲しさを 包んだような

寂しそうな 雨が降る

街灯の灯りが 濡れた道路を

照らす ひととき

歩きたびに 君の靴で

張り付いた 雨水弾けて

粒となり 路上に落ちる

靴音と雨の音が

響きあう

道路は

楽しそうに

濡れた路面に

光りを弾く

すれ違う 色とりどりの

傘の列 忙しそうに

桜木町駅へ 急ぐ人たち

食事を終えて 帰る人

人の群れは 二人の前を

過ぎてゆく

相合傘の二人には

君の素敵なワンピース

俺の姿と合わなくて

済まぬと思いつつ

歩む道

君はお構いなしに

俺の腕にぶら下がり

一緒に歩く 馬車道の

駅まですぐの 道だけど

濡れはせぬかと 気にかかる

なるべく 君に差しかける

傘を君は押し返す

君のワンピースが濡れる事が

気になるだけ・・・

駅について 喫茶店駆け込み

熱いコーヒー 注文して

雨粒ガラスに ついた窓

宝石色に 光りめく

しばらく会話を楽しんで

雨が小降りになった頃

改札抜けて 東急電車に

飛び乗り 帰る電車の中

浜の夜景が 飛び去って

移ろい動く 寂しさか

秋の雨は また俺に

そんな思い出 蘇らせる

君と歩いた 雨の馬車道

今となつては 胸痛む

不思議な感覚 感じてる

あの日の夜は 幻想のように

美しく 俺の胸に残ってる

雨の音まで はっきりと

秋がもたらす幻想の夢

時の過ぎ去る 速さだけ

消えると信じていたけれど

消えぬ 心の不思議さか

君の声と 雨音が

混じって 聞こえる

秋の夜

笑って過ごした

あの日の夜を・・・

- - - - -

泣きべその空

作詞：たけぼんだぬき

外の薄暗い景色

そして 今にも

なきそうな空

秋の物悲しさに

きつと空も浸ってる

地元の山も 灰色の雲に

包まれてね。

ちよっぴり悲しそう・・・

不思議だね 空って

色んな表情を見せてくれるね

楽しそうに笑っている

爽やかに 胸をはって威張ってる

切なそうに 無言になる空

嬉しそうに 真っ赤に染まって

微笑んでいる

色んな空が 僕の頭の上に

広がっている

あそこに 映画館のように

僕の心を写せれば きっと

楽しいだろうな。

今日は澄み渡る空は

見れないけれど

灰色の雲が空全体を

覆い尽くして 今にも

泣き出しそう・・・

どこかの遠い空は

晴れているのかな

白い雲が ぽつかりと

浮かんでいるのかな

想像すると楽しいよね

秋の空は 色んな心を

私に与えてくれる

空いっぱい 僕の想いは

広がっていくんだ

あの山もきつと 空に

想いを寄せているんだ

切ない思いが 寂しさを

掻き立てて 空に

話しかけているんだね

きつとそうだよ

そんな表情を 僕に見せているもん

自然の醸しだす 様々な表情に

僕の心も 空いっぱい

広がっていくんだ

いっぱいね・・・

-
-
-
-
-
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247h/>

真木山太 創作詩集2

2010年10月8日21時18分発行